朝日選書
316

長田 弘

見よ、旅人よ

長田 弘 著

見よ、旅人よ

朝日選書 316

長田　弘（おさだ・ひろし）
1939年福島市生まれ。早稲田大学卒業。詩人。詩集に『言葉殺人事件』『深呼吸の必要』（晶文社）など。著書に『詩人であること』（岩波書店）『詩と時代1961—1972』（晶文社）『アウシュヴィッツへの旅』『私の二十世紀書店』（中公新書）『風のある生活』（講談社）など。

見よ、旅人よ　　朝日選書 316

1986年10月20日　第1刷発行　　定価1100円

著　者　長田　弘
発行者　八尋舜右
印刷所　共同印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104 東京都中央区築地5-3-2　電話 03(545)0131(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部　振替・東京0-1730

© H. Osada 1986　Printed in Japan　　装幀・多田進

ISBN4-02-259416-0

目次

第一章　エレミヤ・ブルース　3
モスクワ　レニングラード　ワルシャワ　クラクフ
テレジーン　プラハ
第二章　荒野とハンバーガー　51
アイオワ・シティ　サンフランシスコ　シカゴ
ニューヨーク　ヴィクスバーグ
第三章　影の住人たち　90
アイオワ・シティ　エイムズ
第四章　旅の宿　142
ロンドン　アムステルダム　パリ　ルクセンブルグ
コート・ダジュール　トリーノ　シャモニー

第五章　共和国の幻　181
ブルゴス　マドリード　トレド　セビリヤ
レリダ　バルセロナ
第六章　南からの手紙　223
モーレア島　バリ島　ジョクジャカルタ
ダエト　マニラ　シンガポール
第七章　シンガポール・ブルース　265
シンガポール
あとがき　306

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見よ、旅人よ

見よ、旅人よ、いまこの島で

W・H・オーデン「この島で」

第一章　エレミヤ・ブルース

一

地下鉄マルクス大通り駅で、わたしは迷ってしまった。赤の広場への出口がわからなくなってしまったのだ。

おもわず立ちどまってしまったわたしの背を、誰かの手がかるく叩いた。ふりむくと、目のさめるような赤いジャケットを着て、ミニ・スカートに黒い皮のブーツをはいた一人の少女が立っていた。長い金髪がきれいだった。短く歯切れよいロシア語でたずねられた。わたしが首をふると、少女はまっすぐわたしをみつめ、それからわずかに微笑んだ。

「どこへゆくの」こんどは、明確な英語だった。

わたしはこたえた。「赤の広場への出口がわからないんだ」

少女は一瞬顔をしかめ、そしていった。「何しにゆくの」

わたしは口ごもった。何とこたえてよいか、わからなかった。少女はわらいだし、すぐにわらいや

め、わたしを押すようにしてうながした。
地下道をくぐって、明るい広場にでた。赤の広場ではなかった。賑やかなその広場は、マニェジ広場だった。
「この広場のうえが赤の広場だわ」どうでもよいような口調で、少女がいった。乳母車を押してきた鳥打帽の男が、そのとき少女にぶつかった。少女は身体をひねってとびしざると、鋭い声でののしった。黒い服にすっぽりと身をつつんだ老婆が、そばで声をだしてわらった。子どもたちが三人、叫ぶようにたがいに追いかけあって、広場の人混みをぬけてきた。
屋台のアイスクリーム屋がでていた。少女は立ちどまり、わたしの肩を指で抑え、「待って」すばやくいうと、ばたばたと駈けだした。アイスクリーム屋のアイスクリームの箱をのぞきこんだ。そして、両手に一コずつアイスクリームをもってもどってくると、いきなりその一つをわたしの掌に押しつけた。
「ねえ、マロージェノエ（アイスクリーム）でいちばんおいしいのは、この十九カペイカのマロージェノエなのよ。いつもこれがまっさきに売りきれてしまう」そして弁解するように、すばやくつけくわえた、「わたしはマロージェノエがすごく好きなの」
「オーリャというの」少女はいった。それから見透かすような目をして、低くいった。「赤の広場になんて、何もないわよ」
少女はわらい、そして「グッド・ラック」明るい声でそういうと、手をふって、ひろい大通りを敏

捷な小動物のようにきびきびと横切ると、ふりむきもせず、むこうがわの人混みに紛れてしまった。マロージェノエを一つ、見も知らぬわたしの掌にのこして。

けれども、オーリャのいった言葉はほんとうだった。モスクワのおもいっきり乾いた空気には、マロージェノエの冷たさは、最高だった。そして、赤の広場には何もなかった。マロージェノエをたべてしまうと、わたしにはすることが急になくなってしまったような気がした。赤の広場に面した単調なクレムリン宮殿のちょうど中央に建てられている、真四角なレーニン廟。長い見物人の列が、レーニン廟から広場の端までのびていた。たくさんの鳩が絶えず石の広場を舞いたっていた。赤の広場をはさんでクレムリンとむきあって建つ、グム百貨店のいかにも重々しいショーウィンドウにそって、わたしは聖ワシリー寺院のほうへぶらぶら歩いていった。

一つのショーウィンドウが、わたしを立ちどまらせた。窓いっぱいに女性の下着がひろげられていた。赤いパンティが、黒いスリップが、透明な肌いろのストッキングが、珍しい蝶のようにピンでとめられて、飾られていた。若い少女が数人、熱心にウィンドウをのぞきこんでいた。それは、ちょうどレーニン廟を正面にみるウィンドウだった。宏大な赤の広場をあいだにして、赤旗と赤いパンティとが正しくむきあっているのだ。少女たちが背をむけているのは、石畳のむこうに大蟻のようにつながってみえる革命の父へむかう行列だった。その対照に、わたしは胸を突かれた。

わたしはオーリャの赤い服を目の底におもいうかべる。オーリャはあの赤い服の下にどんないろの下着をつけていただろう。みだらな連想に誘われたのではない。オーリャの真っ赤な服の下に若い生

きた傷つきやすい肉体が息づいているとすれば、そのちょうど反対がわには、真っ赤な旗が隠している、いまは生きていない革命家の、もはや傷つくことのない硬直した死体がある。そのことをかんがえて、わたしはむしろ粛然としたおもいに誘われたのである。

セリョージャに出会ったのも、オーリャに出会ったのとおなじ日だった。夜。そのときは、猫をみていた。

その猫は、レストラン・アゼルバイジャンのすぐそばの、薄い闇の吹きだまりのなかに、ふさふさした灰いろの毛に被われてうずくまっていた。逞しく太った猫だった。冷たく明るい石の闇が、猫の灰いろの毛を、ふしぎな銀いろに光らせていた。猫は太い前足でしっかりと、おおきな魚の頭を抑えつけていた。猫はわたしを一瞬無関心に睨みつけると、ゆっくり退屈そうに、じぶんの頭ほどもある魚の頭を、ほとんど音もたてずに噛みくだいた。野良猫というより、街の猫である。しぶとくも艶やかな猫である。

足音がちかづいてきて、わたしのそばでとまった。鳥打帽をかぶった若い男だった。男はわたしのみているものをみて、ヒューと細い声でわらった。それきり黙ったままうつむいて、男はわたしとおなじように、闇のなかのその猫をみつめていた。猫は、じぶんをみつめている二人の男に、まったく何の注意もしめさなかった。黙々と優雅に、魚の頭に熱中していた。

「猫は」呟くとも、話しかけるともなく、傍らの見知らぬ男がいった。「いい食事にありついた」吃るような英語だった。「どうだい、きみもいい食事をしたくないか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一語一語単語をあつめるように、男はいった。けれど、目はじっと闇のなかの猫をみつめたまま、ふりかえったわたしをみようとさえしなかった。

「ありがとう。だが、ぼくはきみを知らない」そうしかいえなかった。レストラン・アゼルバイジャンは満員で、わたしは断られたばかりだった。男はこたえなかった。わたしはもう一ど、おなじ言葉を繰りかえした。「ぼくもきみを知らない」

こんどは男はこたえたが、ふたたびためらうように黙って、それから早口に囁くように、

「だが、ぼくたちは友だちになれる。ぼくの名はセリョージャだ」。依然として目は猫にむけたままだった。

セリョージャと名のった若い男の言葉は、単純だった。それだけに、わたしは男の言葉の意味するものが何か、理解できなかった。故買屋、それとも闇ドル屋だろうか。トックリのセーターに厚いコートを羽織ったセリョージャの服装は、貧しいものだったが、崩れがなかった。鳥打帽のつばに匿されて、セリョージャの表情はみえなかった。

「ぼくはきみを知らない」わたしはもう一ど繰りかえした。すると、わたしの顔をのぞきこむように、セリョージャははじめてふりかえって、静かに歌うようにいった。

「だが、ぼくたちは友だちになれる」

「友だち?」

セリョージャはあいまいに微笑した。むしろ幼いといえそうな若い顔が、明るい闇のなかに微かに

ゆがんだ。
「そうだ。友だちだ。きみは女を欲しくないか？」
「女？」こんどはわたしが黙りこむ番だった。
「そうだ。きみは女と友だちになれる。なぜなら、その女はぼくの友だちだ。きみはぼくの友だちの女の部屋で、いい食事をすることができる」
おもわずわたしは、声を殺してわらった。ぎごちなく咆えるようないいかたのせいで、セリョージャの言葉がひどく真剣な冗談のように聴こえたからだった。
「いやだ」わたしはいった。
「なぜだ？」セリョージャがいった。
「そうしたくないからだ」
セリョージャは顔をそむけ、怒ったように黙りこんだ。わたしたちはそこに無縁な二人のように突っ立っていた。足もとの明るい闇のなかで、銀いろの毛を光らせながら、猫は変わらない優美なしぐさで、魚の頭を噛みつづけていた。
「きみはレニングラードにゆくか」セリョージャが憂鬱そうに、ぼそりといった。
「ゆくつもりだ」
「汽車か」
「赤い矢号（レッド・アロー）のはずだ」

セリョージャはかんがえこんだ。赤い矢号（レッド・アロー）は、モスクワーレニングラードをむすぶ特別夜行列車である。もともとはヒトラーの総統専用車としてナチス・ドイツがつくった特別寝台車を、ナチス・ドイツ敗北後接収したソヴェトが赤い矢号（レッド・アロー）として、看板列車に仕立てなおしたものだった。

セリョージャが顔をあげた。「では、どうだ。ぼくの友だちの女が赤い矢号（レッド・アロー）に乗る。きみと一緒のコンパートメントをとる。運賃はもってくれ。ぼくの友だちの女は、夜モスクワのレニングラード駅で、きみと一緒になる。朝、レニングラードのモスクワ駅で別れる。赤い矢号（レッド・アロー）のコンパートメントは、女の部屋よりもっと安全だ。規則に違反しない。夜行列車は、夜を過ごすための汽車である。きみはいつレニングラードにゆくのだ？」

セリョージャは、突きつめた口調で、まるで英語の例文を暗記したばかりの中学生のように、その「予約」をわたしに繰りかえし誘った。わたしは信じなかった。いかにも突飛すぎてでまかせとしかおもえなかったからだ。しかし、あとになって、そのときのセリョージャの「予約」がけっしてすこしも突飛でなかったのだということを、わたしは知った。『犬になりたくなかった犬』のカナダの作家ファーレイ・モウワットのロシア旅行記によれば、それはもっともありふれたモスクワの真実である。

あのとき、モスクワの路上で、セリョージャに、あるいはオーリャに出会わないままだったら、ときどきわたしはかんがえる、モスクワはわたしにとっていったいどんなモスクワのままにとどまっていたか。オーリャやセリョージャのモスクワは、「革命」のモスクワなどではなかった。それは

「革命」が過去にしかない国、二どと「革命」のない国の首都としてのモスクワだった。
「きみはぼくの友情を裏切るのだ」そういって、魚の頭を噛みつづけていた街の猫をおもいきり蹴とばして消えたセリョージャ。「グッド・ラック」そういって手をふって、午後の大通りの人混みに消えた赤い服のオーリャ。モスクワはかれらのモスクワだった。そしてそれは、うそめいて、何もかもが一瞬の茶番のようなモスクワだった。

きみは「あらゆるもの」だった。だけどきみはいまは
死んだから「何もないもの」だな、ぼくのボボ。
もっと正しくいやあ、からっぽの容れもの。
いやまったく、競売ものだぜ。

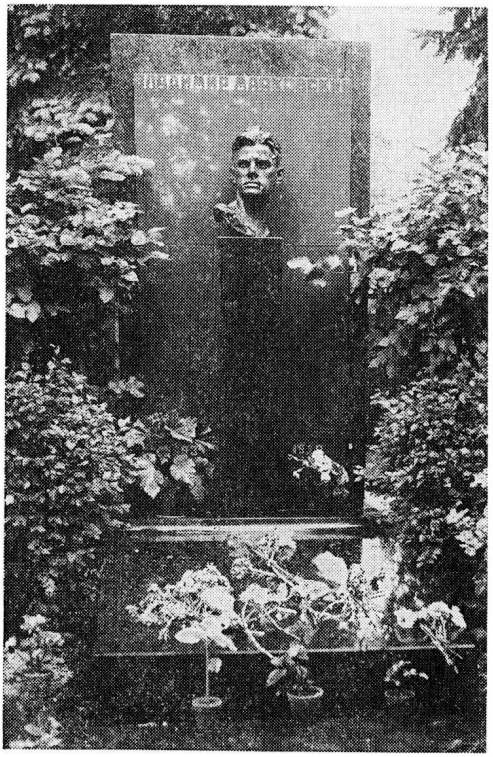
（「ボボの葬礼」カール・プロファー英訳による）

追放された現代ロシアの詩人ヨシフ・ブロツキイに、そんな詩があった。ボボとは犬や女の子の綽名によくつかわれる言葉だが、ブロツキイのボボが何であれ、オーリャやセリョージャのことをおもいだすと、わたしには、オーリャやセリョージャのかれらのモスクワこそが今日の「革命」という「ぼくのボボ」だった、そんな気がいつもしてきてならないのだ。

二

マヤコフスキイの墓にいった。

マヤコフスキイは今日のソヴェトの、いわば革命詩人の輝ける神話だった。地下鉄の駅にも立派なマヤコフスキイ駅という駅があるし、ゴーリキイ通りではいつだって、巨大な青銅のマヤコフスキイがカッと怒った目をひらいて直立して、空を睨んでいる。わたしはいやだった。ほんとうは、マヤコフスキイは、そんな現在の公認された死後の栄光なんかおれに何のかかわりがあるんだというふうな死にざまを、ソヴェトがスターリンの時代にはいってゆく、そのとばぐちで択んだ詩人だった。「ママ、姉さんたち、同志たち、許してください、これはすべきことじゃない……」という遺書をのこして、一九三〇年四月の雪の朝、一発の銃弾をじぶんの手で、じぶんの頭に大型ピストルでぶちこんだのだった。



マヤコフスキイの墓

靴を穿いたまま死んだ。革命のモスクワを、詩人が大股に歩きつづけて穿きつぶした靴である。靴はひど

く傷んでいた。

「目のさきに、棺からぬっとはみ出すように突っ立っているマヤコフスキイの大きな靴の裏があった。生きていないひとのはいている靴の底をまともに見ているというのは異様な感じだった。その大きい大きいマヤコフスキイの黒い靴の底に、二つのへりどめ金がうちつけられて光っているのだった」。

通夜に駆けつけた、そのときモスクワに暮らしていた一人の日本の作家が、そう書きとめている。

「鋲のうたれているところは踵でもなければ、拇指の力がはいる個所でもなかった。へりどめの鋲は、マヤコフスキイの大きな靴の爪先きりきりのところにうたれているのだった。マヤコフスキイは特別大きい額と特別大きい燃えるような眼をもって、こんなにも先をいそいで歩いていたのだ。爪先がへって、鋲をうちつけなければならないほど」(宮本百合子『道標』)。

今日ゴーリキイ通りに突っ立ついかつい詩人の銅像に、誰の目もけっしてみることのできないのは、このへりどめの三角形の鋲を爪先にうった、詩人の擦りへった靴底だ。

マヤコフスキイの墓は、美しい木立ちにかこまれた墓地の一角に、あの怒った面つきそのままの顔を浮かべて立っていた。雨あがりのつやつや光ったマヤコフスキイの墓のまえに、もう秋の終わりの寒さをしのぐ、重い服装をしたロシアの女が二人立ちどまって、何ごとかささやきかわし、そして手にもってきた截り花を、そっとささげて去っていった。静かだった。誰もがひっそりと通ってゆく墓地だった。わたしには花束がない。ぬきだした一本の煙草とマッチを一本、濡れた墓石のうえ、口のあたりにならべて置いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com